

## 2010年3月期 第3四半期 決算カンファレンスコール

(2010年1月28日実施)

取締役 執行役員常務 経理財務本部長 青木 昭一 スピーチ

### <P.1：2010年3月期 9ヵ月通算 決算概要（前年同期比）>

まず、当期9ヵ月通算の連結業績ですが、部品需要が第2四半期まで前年同期を下回ったことに加え、機器事業における携帯電話端末や情報機器の販売減、さらに欧米通貨に対する円高の影響等により、売上高は、前年同期に比べ14.8%減少の7,689億円となりました。

利益については、グループを挙げて製造原価の低減等を含めたコスト削減や生産性向上に努めましたが、減収による影響をカバーするには至らず、営業利益は前年同期に比べ43.5%減益の380億円となりました。また、当社が保有する(株)ウィルコム株式の評価損、約200億円を当期第3四半期に計上したことにより、税引前四半期純利益、当社株主に帰属する四半期純利益は、それぞれ、前年同期に比べ、60.3%、67.4%減少の、327億円、185億円となりました。

なお、9ヵ月通算の設備投資額、減価償却費、研究開発費ですが、資料に記載の通り前年同期に比べそれぞれ減少しております。

### <P.2：2010年3月期 9ヵ月通算 事業セグメント別売上高>

続きまして、2ページをご覧ください。当期9ヵ月通算の事業セグメント別の売上高を記載しております。

期初からデジタルコンシューマ機器市場が回復したことに加え、第3四半期からは産業機械や自動車関連市場での生産活動も回復基調となり、当社部品事業の生産も全般的に拡大基調となりました。また、機器事業

においては、携帯電話端末や情報機器の新製品投入を積極的に行うなど、売上拡大に努めましたが、9ヵ月通算では、部品事業及び機器事業ともに、前年同期の水準には至りませんでした。

#### ＜P. 3：2010年3月期 9ヵ月通算 事業セグメント別事業利益＞

次の3ページをご覧ください。当期9ヵ月通算の事業セグメント別事業利益を記載しております。

減収及び円高の影響により、グループ全体では前年同期に比べ、事業利益は前年同期比43.8%の減益となりましたが、電子デバイス関連事業は、子会社のAVXの貢献や原価低減、生産性向上の取組みにより、同26.8%増益と、収益性の向上が図られております。また、中段の機器事業においては、通信機器関連事業での構造改革や原価低減の効果により損失が縮小し、事業利益は前年同期に比べ110.4%増と、大きく採算の改善を図ることができました。

それでは、当期9ヵ月通算の決算要約につきまして、次の4ページで説明いたします。

#### ＜P. 4：2010年3月期 9ヵ月通算 決算要約（前年同期比）＞

1点目は、円高の影響です。当期9ヵ月通算の平均為替レートは、米ドルが94円、ユーロは133円となり、米ドルは前年同期の103円から9円の円高、ユーロは前年同期の151円から18円の円高となりました。この結果、邦貨換算後の売上高を約485億円、税引前四半期純利益を約135億円、押し下げる要因となりました。

2点目は、期初よりグループを挙げて取組んでおりますコスト削減の進展です。当期通期では、前期に比較し▲560億円の削減を目標として

おりましたが、既に第2四半期までにこの目標数値を達成しており、9ヵ月通算では、前年同期に比べ約▲700億円の削減を図ることができております。今後も、コスト削減への取組みを緩めることなく、進めてまいります。

3点目は一時損益の計上です。当期9ヵ月通算では、合計で、約185億円の費用を計上しております。

一時的な損失としては、PHSサービスを提供する(株)ウィルコムの子会社の評価損、約200億円を計上しております。当社は、(株)ウィルコムの発行済株式の30%を保有しておりますが、定期的に実施している、同社に対する投資の公正価値を算出した結果、投資簿価を下回ったため、当期第3四半期に同株式の評価損を計上いたしました。

なお、この損失は、セグメントでは本社部門損益に計上しております。一方、一時的な利益としては、情報機器関連事業において、固定資産の売却益、約15億円を第2四半期に計上しております。

以上が当期9ヵ月通算の決算の要約です。続きまして、当期第3四半期、昨年10月から12月の3ヵ月間の業績についてご説明いたします。5ページの表をご覧ください。

#### <P.5：2010年3月期 第3四半期（3ヵ月）決算概要>

上段の表は、当期第3四半期の実績と前年同期との比較であり、下段の表は、直近の第2四半期と比較しております。

当期第3四半期は、前年同期及び当期第2四半期と比較して、いずれも2桁の増収となりました。また、営業利益は、増収並びに原価低減や生産性向上の効果により、それぞれ大幅な増益となりました。それでは、

セグメント別の状況についてご説明いたします。6ページをご覧ください。

#### ＜P. 6：事業セグメント別四半期推移

##### ファインセラミック部品関連事業＞

左側のグラフは、前期からの四半期別の売上高及び事業利益の推移を、右側には前年同期比及び当期第2四半期比の増減要因を記載しております。本日は時間の都合上、当期第2四半期との比較にて、ご説明申し上げます。

まず「ファインセラミック部品関連事業」ですが、第3四半期は第2四半期まで低迷していた半導体製造装置用部品などの産業機械用部品や、自動車関連部品などの主要製品の需要が回復基調となり、売上高及び事業利益ともに第2四半期に比べ増加いたしました。

#### ＜P. 7：事業セグメント別四半期推移 半導体部品関連事業＞

続いて7ページの「半導体部品関連事業」ですが、携帯電話端末やデジタルカメラなどのデジタルコンシューマ機器向けの水晶／SAWデバイス用セラミックパッケージや、CCD／CMOSイメージセンサー用セラミックパッケージに加え、有機パッケージの需要も増加したことにより、第2四半期に比べ増収となりました。また、事業利益は、増収効果に加え、原価低減と生産性の向上により、改善が図れております。特にセラミックパッケージの量産効果により、大きく収益性の改善を図ることができました。

#### ＜P. 8：事業セグメント別四半期推移

##### ファインセラミック応用品関連事業＞

次の8ページの「ファインセラミック応用品関連事業」ですが、ソーラ

一エネルギー事業では、政府の補助政策により国内市場において急速な需要の拡大が続き、また、海外市場においても緩やかな需要の回復がみられました。加えて、自動車産業を中心とする切削工具事業の需要も回復基調に転じたことにより、第2四半期に比べ増収となりました。

事業利益は、増収と原価低減の効果により、大幅な改善を図ることができました。

#### <P. 9 : 事業セグメント別四半期推移 電子デバイス関連事業>

続きまして、「電子デバイス関連事業」です。9ページをご覧ください。デジタルコンシューマ機器向けの部品需要の拡大が続き、増収となりました。事業利益は、増収効果に加え、徹底した原価低減などのコスト削減の推進により、水晶関連製品や薄膜部品、コンデンサなどの主要製品の採算が大きく改善した結果、セグメント全体では売上の伸びを上回る大幅な利益改善を図ることができました。

#### <P. 10 : 事業セグメント別四半期推移 通信機器関連事業>

続いて10ページをご覧ください。

「通信機器関連事業」ですが、第3四半期より新モデルを国内外で予定通り投入することができ、販売モデル数が第2四半期に比べ増加しました。また、海外においては、新規客先への販売効果もあり、大幅な増収となりました。一方、事業利益は、販売増と構造改革によるコスト削減効果が着実に現れ、6四半期ぶりの黒字を果たすことができました。

#### <P. 11 : 事業セグメント別四半期推移 情報機器関連事業>

続きまして11ページの「情報機器関連事業」ですが、主要客先である企業や官公庁などにおいては、依然として情報化投資の抑制が続きまし

たが、複合機「タスクアルファ」をはじめとした新製品の拡販により、第2四半期に比べ増収となりました。

また、当期第3四半期の事業利益は、第2四半期とほぼ同額ではありませんが、第2四半期に計上した一時利益、約15億円を除いたベースで比較しますと、実質的には30%強の大幅な増益となっております。前期に進めた開発、生産の集約などによるコスト削減の効果が着実に採算向上に現れております。

#### <P.12：事業セグメント別四半期推移 その他の事業>

続いて12ページの「その他の事業」ですが、京セラコミュニケーションシステム(株)の増収に加え、京セラケミカル(株)での生産性の向上による収益改善により、増収増益となりました。

以上が、当期第3四半期の状況です。

#### <P.13：2010年3月期 業績予想>

続きまして、今期通期の業績予想についてご説明申し上げます。13ページをご覧ください。

当期9カ月の実績と第4四半期の事業環境を踏まえて、昨年10月に公表しました通期業績予想を、こちらの表に記載のとおり修正いたしました。売上高及び営業利益は前回予想から上方修正しております。また、税引前当期純利益については、(株)ウィルコム株式の評価損、約200億円を計上したものの、前回予想を達成できる見通しであります。

なお、皆様ご存知のとおり、(株)ウィルコムは、事業再生ADR（産業活力再生特別措置法所定の特定認証紛争解決手続）を申請中であります。

当社は、同社に対する売掛金残高が、昨年12月末現在で約155億円ありますが、この金額は第2四半期時点から変更ありません。今後、事業再生ADRの進捗の状況次第では、当社業績に影響を及ぼす可能性があります。現時点では、この影響については、当期業績予想に含めておりません。

次に、設備投資額、減価償却費、研究開発費であります。設備投資額及び減価償却費につきましては、前回予想を下回る見通しであります。

**<P.14：2010年3月期 業績セグメント別 連結売上高予想>**

**<P.15：2010年3月期 業績セグメント別 連結事業利益予想>**

事業セグメント別の売上高と事業利益の予想については、それぞれ14ページ、15ページに記載しております。15ページの事業利益の表をご覧ください。

事業利益の予想につきましては、表の右端に、前回予想と比較した増減金額を示しております。前回予想に比べ、部品事業では160億円、機器事業では50億円、それぞれ上方修正いたしました。

今回の業績予想の修正要因をご説明しますので、16ページをご覧ください。

**<P.16：2010年3月期**

**通期業績予想の修正要因（前回予想比）>**

1点目は、「主要市場での想定を上回る部品需要の回復」です。デジタルコンシューマ機器市場においては、想定以上に生産活動が活発となり、期初より部品需要の回復が見られました。また、ソーラーエネルギー事業の需要の増加も大きく貢献しております。

このような急激な需要の回復に対して、当社は人員の再配置により、客先要求に合った部品の生産体制を迅速に構築し、またソーラーエネルギー事業などの成長事業に対しては、計画通り生産能力の増強を行い、これらを確実に収益増に結びつけることができました。

なお、当期第4四半期の市場見通しですが、部品需要は例年の季節要因程度の減少に留まる見通しであります。

要因の2点目として、「収益性の改善」が挙げられます。徹底した原価低減と生産性の向上に向けての取組みや、通信機器における事業体制の再構築などによる経営基盤の強化により、全てのセグメントにおいて採算改善を図ることができました。前期下期以降、今回の不況を今後のグループの飛躍につなげるチャンスと捉え、グループ一丸となってそれぞれの事業基盤の強化に努めてまいりました。目標とする高成長、高収益企業を目指し、さらなる経営基盤の強化を図ってまいります。次の17ページをご覧ください。

#### <P.17：2010年3月期 セグメント別売上高・事業利益>

こちらのスライドは、今回の売上高及び利益予想と前回予想を、セグメントごとに比較した図です。

「部品事業」については、4セグメント全ての売上高は前回予想を上回る見通しです。また、事業利益については、「ファインセラミック部品関連事業」を除く3つのセグメントで、前回予想を上回る見通しであり、部品事業においては、大幅な収益性の改善が図れると考えております。

機器事業については、「通信機器関連事業」の売上高は前回予想を下回るものの、事業基盤強化に向けた取組みの成果により、前回予想より損



失を縮小できる見通しであります。また、情報機器関連事業についても、原価低減や新製品の貢献により、利益改善が図れる見通しです。

まずは、今回上方修正しました業績予想の達成を図り、来期の本格的な業績拡大につなげてまいりたいと思います。

以 上